

大山学講座

『歴史道(伯耆往来)ウォーキング』

開催

7月5日に、第2回大山学講座「歴史道(伯耆往来)ウォーキング」を行い、18人が参加しました。

講師に名和公民館サークル「名和歴史研究会」の金田千義さんを迎え、近世の主要道である伯耆往来を、大山町長野から名和公民館まで歩きました。コース途中の豊成、倉谷、西坪では、伯耆往来にまつわる歴史的、文化的史跡や物語について、講師から説明を受けました。

現在は廃道となった長野と豊成を結ぶ「ホエゴ坂」という急斜面の難所では、昔歩いたことを懐かしむ参加者も

講師の熱の入った説明のもと、周辺に住んでいる参加者も知らなかったような史跡や言い伝えなどを知ることができ、参加してよかったという声も聞かれ、充実したウォーキングとなりました。



▶講師の解説に聞き入る参加者のみなさん



▶ホエル(泣く)ほどつらい「ホエゴ坂」

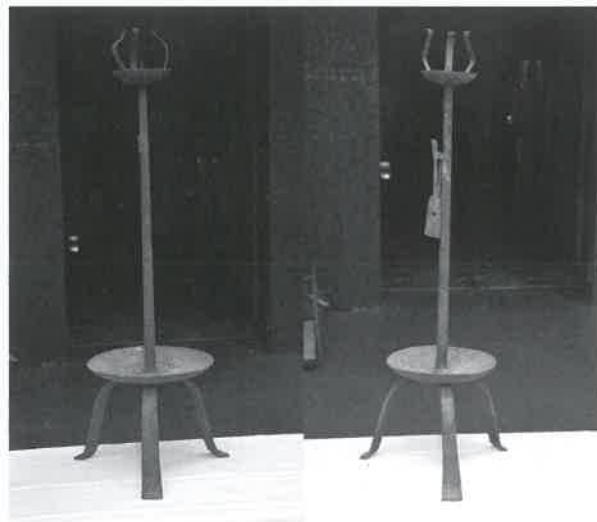
まちのたから(6) 文化財室通信

大山寺の鉄燭台の巻

大山寺霊宝閣に保管展示されている鉄燭台2基について、鳥取県文化財保護審議会(8月10日開催)が、県の指定保護文化財とするよう答申しました。今回はその大山寺伝来の鉄燭台を紹介します。

燭台は、灯台(皿状の灯蓋に油を入れ灯芯に灯りをともすもの)よりもやや遅れ、中世以降に普及しました。大山寺の燭台は、仏前で香・華・灯を供養する香炉・花瓶・燭台の組み合わせ(三具足、五具足と言います。)で用いられてきたものです。鉄の鍛造品で、竿と脚台には刻銘があります。その銘から、一基は天文19年(1550)に金剛童子社の宝物として、もう一基は天文22年に大聖文殊宝前に寄進されたことが知られます。天文22年銘燭台には願主と思われる重なる人物の名もありません。

2基は形・大きさがよく似ています。三脚台の上に台盤と細い竿が載り、竿の上端には蠟燭受け皿の蠟蓋(ろうさん)や蠟燭立ての針のほかに、帯板状の灯械も付いており、灯明皿を載せて灯台としても使用できるようななっています。竿には芯挟みを掛けるL字形鉞金が付き、天文19年銘燭台には鍛鉄製芯挟みも付属しています。燭台の大きさは、高さ約87cm、竿長約56cm、脚台最大幅約4cm、蠟蓋径約11cmで、台盤のみが径約22cmと約25cmで大きな差があります。



▲天文19年銘(右)と天文22年銘(左)

鉄の鍛造燭台で中世に遡るものは、全国的にみても非常に少なく、東北地方に若干例が知られるのみです。大山寺の鉄燭台は、それらと形式がまったく異なり、近世に普及

する蠟蓋と台盤を備える燭台の先駆けと言える形態のもので、西国に伝わる稀有な作例として工芸史的な意義がきわめて大きいものです。刻銘も中世大山寺の状況を伝える一次史料として価値が高いと評価されました。

平成30年の大山開山1300年に向け、また一つ貴重な指定文化財が追加される見込みとなりました。(人権・社会教育課文化財室)